

主 題：信仰の自己診断 2 ——肉的な信仰者——
 聖書箇所：コリント人への手紙第一 3章1-9節

きょう私たちはいろいろな問題を抱えていたコリント教会の霊的問題について学んでいきます。私たちがなぜこの学びをするかという、そのことを通して自分自身の霊的状态を知り、自分自身の信仰を吟味する機会になるからです。そして願わくば、それを学ぶことによってひとりひとりがきょうから新しい歩みを始めていくことを期待します。

きょうのテキスト1コリント3：1-9の中で、パウロはこの教会にあなたがたはいつまで子どもなのか——というメッセージを送り、この教会を叱っています。ここにはパウロの嘆きが記されています。というのは彼らは霊的に大変幼稚で、霊的に成長していなかったからです。霊的成長は神のみこころ、命令であり、聖書は霊的成長は可能であると教えます。また、霊的成長は、本当に救いにあずかったクリスチャンたちの願いでもあります。我々ひとりひとり成長したいという願いを持って生きているはずです。ですからパウロは、では、あなたたちはなぜ成長するために努力しないのかと問いかけるのです。

パウロが第二次宣教旅行に出かけた時に、パウロと仲間たちはアテネでの働きを終えた後、南にあるコリントという町に立ち寄りしました。そこでパウロは天幕作りの仕事をしている同業者のアクラと妻のプリスキラの家に滞在することになります。彼らはそこで天幕作りをしながら、安息日には会堂で神のみことばを教え、多くの人々が救いへと導かれた様子が使徒の働きの18章の中に記されています。もしこのことばを天幕作りと訳したら、天幕というのは恐らくイスラエルの先祖たちが入国して来た時に彼らに移り住んだ、移動式の住居のことです。またある人たちはギリシャ語のこのことばは実は「皮細工」ともいいます。いずれにしろ、パウロたちはこういった手に職を持っていたのです。恐らく父親からそういった仕事を教えられたのでしょう。いずれにしろ、彼自身がやっていた仕事と同じことをしている同業者であるこの夫婦のもとにパウロは身を寄せたのです。

そして、パウロは一年半もの長い間、「ここに腰を据えて」滞在し、コリントの人々に「神のことばを教え続けた」と使徒18：11が教えます。そして、その働きが終わった後、パウロたちはシリアへと移っていきます。彼らがシリアへと向かって、最終的にはエルサレムに戻って行くのですが、どこにいても間違いなくこのコリント教会のクリスチャンたちのことを思ったでしょう。彼らの顔も浮かんだし、彼らの名前もちゃんと覚えていたし、パウロたちが彼らのことをとりなしていたことは言うまでもありません。彼らは信仰を持ったクリスチャンたちが成長することを望んでいたのです。ところが、パウロが知った事実はこの人々の信仰が成長していないという大変悲しい知らせでした。1節にはパウロの落胆が記されています。「兄弟たち。私はあなたがたに、御霊に属する人に対するようには語りことができずに、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように語りました。」とあります。パウロ自身の嘆きがそこにあります。なんて成長していないかと、なぜ信仰において成長していないのか。

少し後でも見ますが、コリントの教会の人々に対してまとめるとこういうことが言えます。一つ目はこのコリントの人々は救いにあずかっていた、救われていたということです。二つ目は、しかしそれでいながら彼らは霊的に大変幼稚で、霊的に成長していない幼子であったということです。そのことをパウロは2節で食べ物を使って説明します。「私はあなたがたには乳を飲ませ、固い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。」、なぜ大人が食べる堅い食べ物を与えずにミルクを与えたのか——。それはまだ彼らには消化できないからです。子どもが育っていくに当たっても、まずミルクを与えて、離乳食を与えて、そしてその後普通の食べ物を与えていきます。そうやって成長することを私たちはよく知っています。ですからパウロは彼らがまだ成長していない、霊的幼子であることをこうして嘆くのです。

A. 霊的幼子の特徴 1-4節

さて、この1-4節で、パウロはこの霊的幼子たちの特徴について教えています。そしてどうしたらその霊的幼子の状態から脱却することができるのかが5-9節の中に出てきます。

1. パウロによる診断 1-3節

まずパウロはこのコリント教会の人たちが霊的に幼子だという診断を下しました。その根拠がここに書かれています。1節を見ると、「御霊に属する人」と「肉に属する人」という2種類の人が紹介されています。「肉に属する人」というのは「キリストにある幼子」とであると記しています。では一体この人たちはどういう人々なのかということです。

・御霊に属する人

まず「御霊に属する人」とあります。これは辞書によれば「神の霊が与えられてその霊に導かれてい

る人」、聖霊なる神が与えられて、その聖霊なる神様によって導かれている人、また聖霊なる神様によって満たされている人、霊的な人ということです。

・肉に属する人

「肉に属する人」というのは、肉からできている人、私たちのからだはまさにそうです。我々は肉からできています。もともとはそういう意味です。

しかし、この二つが対比されています。「御霊に属する人」というのは聖霊が与えられて聖霊に満たされて聖霊に導かれている人。「肉に属する人」というのは肉がこの人たちを満たしていて、肉によって導かれているような人たちです。彼らは信仰者としてあるべき、聖霊なる神様によって導かれて歩むという霊的な人としての歩みをしていなかったということです。まさに彼らを見てパウロが思ったことは、救われていない人と余り変わらないではないかと。なぜかという、肉は神様のみこころに反することをするように働きます。救われる前の私たちはまさにそうでした。神のみこころに従って行くのではなくて、自分の思いどおりに生きようとしていた。神のみこころに背いて自分の願いどおりに生きようとしていたのです。ですから肉がその人たちを導いているということは、まさに彼ら自身の考えること、彼ら自身の願うことは神のみこころに反する願望であり、そういった思いが彼らの心を支配し導いていたことになるのです。

ただ救われていたと先ほど言いました。なぜかという、1コリント2：14を見ると、そこには「生まれながらの人間は」と書いてあります。つまり救われていない者たちは「神の御霊に属することを受け入れ」ません。でもコリントの人たちは「生まれながらの人間」、救われていない人間ではなかったのです。つまり彼らの歩みは習慣的に罪を犯し続け、神に逆らい続けても構わないという歩みではなかったのです。彼らの中には、神を喜ばせたいという思いがあったはずですが、なぜならそれが新しく生まれ変わった人の特徴です。ところが彼らは正しい選択をしないで、肉的な人としての歩みを選択して歩んだのです。クリスチャンも習慣的に、継続的でないにしてもこの世の人々と同じような歩みをするのが確かに可能ですが、皆さんおわかりのように、これは神の栄光を汚すものだという事です。罪を犯して神の栄光を現すことはできません。でも、救いにあずかった私たちが罪の中を歩まないことを願っていながら、残念ながら罪の中を歩んでしまったり、悲しいことにイエス様を知らない人と同じようなことをしてしまったりする、そのことをみことばは私たちに教えてくれているのです。

ガラテヤ5：16でパウロは「私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。」と言います。ということは、御霊によって歩まなければ、肉の欲望を満足させることになるということです。どういう選択をするのかを私たちはよく考えて、注意しなければいけないということです。続く17節には「なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。」とあります。我々のうちに内住する聖霊なる神様が私たちを導いていこうとする神に喜ばれる歩みと、我々の肉が私たちを引っ張っていこうとする歩みは全く相反するものだ。ですから24-25節にも「キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまな情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。」と、パウロはこう生きなさいと言っているのです。こう生きることが神に喜ばれることであって、そうでない神を喜ばせない生き方も悲しいことに可能だからです。だから正しい選択をするようにと彼は勧めるのです。

そうすると、この3章の中に書かれているこういった「肉に属する人」、「キリストにある幼子」というのは、何が神様に喜ばれ、何が神のみこころなのかを正確に見きわめて、それに従って行くことができな人たちです。イエス様を信じたての人たちというのは、その判断力においても危なっかしく正しくない選択をする傾向があります。もちろん成長した者たちも正しくない選択をしてしまう弱さがありますが、救われたばかりの人たちは大変弱いものです。コリント教会の人たちもまさにそういう状態だとパウロは言うのです。そしてそのことを理解力と消化、代謝の両面から説明しています。

1節を見ると、彼らは霊的に非常に幼い、なぜかという彼らは霊的な真理をちゃんと理解することができなとあります。パウロはこう言います。「私はあなたがたに、御霊に属する人に対するようには語るができずに、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように語りました。」と。彼が言っているのは、難しいことを語っても彼らは理解できないから、彼らが理解できるように語らなければいけないということです。それほど彼らは幼稚だったということです。神の真理を正しく理解することがまだできていなかったために、まさに幼子に語るようにパウロは話したと。

2節は消化・代謝の話です。「私はあなたがたには乳を飲ませ、固い食物を与えませんでした。」、先ほど説明したように、まだまだ生まれたての新生児のような霊の状態にある彼らには消化できないとパウロは言います。

少し注意していただきたいのは、2節「堅い食物を与え」なかったのは「あなたがたには、まだ無理だったからです」と書いてあり、「無理だった」と過去の話をしています。そしてその後「実は、今でもまだ無理」なのだがあります。確かに信仰にあずかった時は幼子で、彼らの理解力も彼らがその真理を消化することも限界があることがわかります。しかし、パウロは実は今でもできないと言っています。これだけの時間がたっているにもかかわらず、彼らは今もあの時と同じだと。これを聞いた人たちはどう思ったでしょう？あなたたちはこんなに時間がたっているのにまだ信仰の幼子なのかと。信仰の成長というのは、信仰歴の長さによってかなうものではないのです。もしその年数があなたを信仰において成長させるのだったらありがたいのですが、現実とは違います。どんなに年数が長くても信仰において成長していない人がいるのです。なぜなら霊的成長はその信仰歴の長さによって自動的に起こらないからです。

◎ 彼らの問題点

このコリント教会の人たちの問題というのは少なくとも三つのことが言えます。

① みことばをただ聞くだけ

今の私たちにも同じことが言えるのですが、なぜ彼らが信仰において成長しなかったのか、一つ目の理由は彼らはただみことばを聞くだけの者たちだったからです。聞いてもすぐに忘れてしまうのです。我々がみことばを聞いた時に覚えなければいけないのは、そこには責任が生じるということです。例えば皆さんが職場において上司から何か命じられたら、それを行う責任があります。聞いてないとか知らないという言い訳は通じません。神もあなたや私に対してこれが私のみこころだ、これが私があなたに命じることだと言われるのです。聞いた私たちは当然それに対して従っていくかどうか責任があります。でも我々の問題は聞くことが目的になっているかもしれない。例えば私たちが学びに来たり、礼拝する目的が新しい何かを知りたいというものだとしたら、新しいことを聞いたし、新しいことを学んだからそれで十分だと、それで片付けるかもしれない。しかし、ヤコブが「みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。」（ヤコブ1：22）と言っています。コリント教会の人たちは「ただ聞くだけの者」だったのです。メッセージを幾ら聞いても彼らは実行しようとはしなかった。

② みことばを実践しない

二つ目は聞いたみことばを実行しなかったのです。みことばを実践しなければ霊的成長は絶対ありません。保証します。ただみことばを聞いてそれを覚えたとしても、実践するまではそれはあなたの力にならない。ですから先ほどお読みしたヤコブ1：22には「みことばを実行する人になりなさい。」とあり、同じヤコブ1：25には「ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります。」とあります。大切なことを教えてくれました。実行するためには「完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない」ことだと。「完全な律法、すなわち自由の律法」というのはみことばのことです。なぜこういう表現を使っているかというと、完全な神が与えてくれた教えだからです。「自由の律法」というのは、この神のメッセージ、みことばによって罪から自由とされるから、罪のさばきと罪の束縛から自由とされるからです。ですからこれは神のみことばです。そのみことばを一心に見つめて離れない人は神のみことばを忘れないし、聞いたメッセージをしっかりと覚えているのです。覚えていなければ実践できないと。

ヨブという神が喜ばれたひとりの信仰者がいます。彼の友人だったteman人エリファズがヨブに対してこんなことを言います。「神の口からみおしえを受け、そのみことばを心にとどめよ。」と。ヨブ記2：22です。それに対してヨブはヨブ23：12で「私は神の唇の命令から離れず、自分の定めよりも神の口のことばを蓄えた。」と見事な答えをします。道理で神様がヨブを喜ばれ、祝されたはずですが。彼は今私たちが新約で見たように、神のことばをしっかりとうちに蓄えていた。つまりヨブを含めて信仰の勇者たちは、神のみことばを実践したのです。

③ 聖霊にすべてを明け渡して生きていない

悲しいことにこのコリントの教会の人たちというのは、みことばをただ聞くだけであつたし、みことばを実践することもなかったし、もう一つ言えるのは聖霊なる神様にすべてを明け渡して生きていなかったのです。先ほども見てきたように彼らは自分たちの肉が自分自身を治めるように、そのような選択をしたのです。本来なら私たちは神様の与えてくださった助け主、聖霊なる神様にすべて満たしていただいて、その方に支配していただいて、その方に導いていただいて日々の生活を送るのです。私たちはそういうふうに生きることができるようになったのです。でも彼らはそうしなかった。神ではなくて自分たちの力と知恵で生きていたのです。だからそこに成長は見られなかったのです。

2. 診断の根拠 3-4節

そして、パウロが霊的には大変幼子だと診断を下した、その根拠が3-4節に記されています。3節

「あなたがたは、まだ肉の人だからです。あなたがたの間にはねたみや争いがあるのですから、あなたがたは肉の人であり、ただの人として歩んでいることにならないでしょうか。」とあります。今私は「肉の人」とこの訳をお読みしました。新改訳の第二版はちょうど1節と同じように「肉に属している」と訳しています。でも実はこの1節のみことばと3節のみことばはその語尾が違います。なぜ違うかということ、そこに意味があるからです。1節は肉によってできているということです。そして3節は肉によって支配されていることを意味しています。ウィリアム・バークレーという学者は3節で使われている「肉の人」または「肉に属している」ということばについてこんな説明を加えています。「サロキコイ」ということばですが、「これは肉によって支配されていることを意味する。パウロにとって肉とは神から離れた人間性、罪に働くチャンスを与え、罪に感応、共鳴する部分を意味する」と。

つまりこの人たちは罪が自分たちの行動や心のすべてを支配することを許したということです。確かに先ほどもお話ししたように、私たちの心の中にも神に喜ばれたいという思いがあるし、同時に今までのように生きていけと私たちを誘惑しようとする思いがあることも事実です。この人たちの歩みを見た時に、本当に救われていない人たちと余り変わらなかった。それもそのはずです。この人たちの問題は自分たちのうちの罪に自分たちを支配されるチャンスを与えていたことです。罪が自由に行動すること、自由に働くことを許したことです。そういうことを選択するならば、神の栄光を現すどころか神様のすばらしさを証することのない存在として歩むことになるのです。

1) 顕著な三つの罪 3-4節

パウロは彼らの問題を話した後、彼らが本当に霊的に幼子なのだということを三つの顕著な罪の存在を明らかにすることによって証明していこうとします。なぜ彼らが霊的に幼稚なのか、なぜならば彼らのうちにはこういった三つの罪が存在しているからだと言うのです。

(1) ねたみ

一つ目は3節に「ねたみ」ということばが出ています。これは誰かに対する強い憤り、誰かに対して怒りを持ったり恨みを持ったり、嫉妬するような、そういった感情を意味することばです。

一ついい例があります。使徒13:45でパウロたちが主イエス・キリストの福音を語った時に、ユダヤ人たちは彼らに対して大変な「ねたみ」を抱いたことが書かれています。「しかし、この群衆を見たユダヤ人たちはねたみに燃え、パウロが語ることに反対し、口汚くののしった。」とあります。ではなぜ彼らが「ねたみに燃え」たのかです。その前の44節「次の安息日には、ほぼ町中の人々が、主のことばを聞くために集まって来た。」とあります。町中の人々がパウロのメッセージを聞くために集まって来たのを見て、ユダヤ人たちは「ねたみ」を覚えたのです。なぜ彼らはパウロたちに対して怒りや恨み、嫉妬心を持ったのでしょうか？ 私たちもこの人たちの心がわかります。私たちにもそういう弱さがあるからです。彼らがねたんだのは自分たちがこれまでと同じ扱いを受けないからです。自分たちがある種の尊敬を得て、人々の注目を浴びていたのかもしれない。ところがパウロがやって来た時に、人々の関心は彼らからパウロに移ったのです。自分たちの教えではなくてパウロの教えに人々は関心を示した。そうすると、そこに嫉妬心が芽生えるのです。自分が考えているような扱いを受けないと、また自分以上に誰かが注目を浴びたり、褒められたりする時、罪の心はじっとしていません。結局問題は自己中心の心です。自分がどんな扱いを受けるか、どう見られるか、人々からどう思われるか、自分のことしか考えない。

(2) 争い

二つ目に出てきていることばは「争い」です。このことばは不和や口論、不一致、意見の相違に起因する争いです。意見の相違、論争を結果として起こる争いだと、このことばは辞書によって定義されます。ある辞書は「このことばによって言及される争いの種類はしばしばことばによる争いとして説明している。例えば誰かについて悪いことを常に言い続けている。もしくは互いに決してよいことを言わない」という意味があることばだと説明します。コリント教会の内情がおわかりになりますか？ 人々は互いにこういうねたむ思い、嫉妬心があった。教会の誰かに対してそういった恨みを持っているのです。それだけではない、本来ならば信仰者は互いに励ましあって、信仰の成長のために尽くすものです。この教会の中には兄弟たちの悪口を言う人々がいたのです。しかも悲しいことに常にそんな働きをしているのです。お互いを褒めることなく悪口を言い合っている。その人たちが霊的に幼稚で幼子だということは明らかです。なぜならそれは救われていない人と同じようなことをしているのです。ですから、3節にあるように「あなたがたは肉の人であり」、まさにその肉によって支配されている人たちであり、

「ただの人として歩んでいることにならないでしょうか。」それは信仰者の歩みだろうか？ それは神の栄光を現す歩みだろうか？ こういう歩みが正しくないことはもう説明するまでもないでしょう。間違っていることは明らかです。なぜかということ、こういう歩みは神の教えてくださる愛に反するものだからです。さっきも言ったように、神が私たちの教会に望んでおられることは、しっかりとお互いがそれぞれの賜物を使い合って、用い合って、「しっかりと組み合わせられ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てら

れる」ことです。エペソ4：16です。つまりパウロは当然教会が成長していくことを望んでいて、その成長の過程においてなくてはならないものは愛だと言っているのです。神が教会に求めているのは、兄弟姉妹たちが本当にキリストが愛された愛をもって互いに愛し合うこと。前回見たヨハネ13：34には新しい戒めを与える、「互いに愛し合いなさい」と。「わたしがあなたがたを愛したように」、イエス様が愛してくださったように「あなたがたも互いに愛し合いなさい」と。でも悲しいことに、この教会はそれを実践していなかった。愛の実践ではなくて罪の実践でした。

こういう歩みというのは愛に反するだけではなく、まさに我々のうちにある肉がもたらす行いなのです。信仰がもたらすものではない、神がもたらしてくれるものではない。ガラテヤ5：20に皆さんよくご存じの罪のリストが続きます。「偶像礼拝、魔術、敵意」、その次に出てくるのは「争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、」、そして21節には「ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。」とあります。今見て来た「争い」も「ねたみ」も入っています。そしてこう続きます。「前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言うておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。」。これはすべて肉の行いだからです。我々の罪がこういう行いを生み出そうとするのです。ですからこういうことをやっているのであれば、悲しいことにその人は罪の支配を許してしまっていると。なぜならこういう歩みはどれを見ても神がお喜びになるものではないからです。なぜならここにあるのはすべて罪です。ですから本当は教会はキリストの愛を実践するところであるにもかかわらず、キリストの赦しを実践するところであるにもかかわらず、そこには嫉妬心にあふれた人たちがいて、兄弟姉妹の悪口を人々に伝えている。まさにあなたたちは霊的に幼子だと。

(3) 分派 4節

先ほどのガラテヤ5章のリストには「分裂」と「分派」も記されていきました。コリント教会の問題というと、確かにこの「ねたみ」と「争い」があったのですが、もう一つの彼らの問題点はこの「分裂」や「分派」だったのです。

4節に「ある人が、『私はパウロにつく。』と言えば、別の人は、『私はアポロに。』と言う。そういうことでは、あなたがたは、ただの人たちではありませんか。」とあります。つまり教会の中に一致がなかったのです。私はパウロが好きだと、いや、私はアポロが好きだと言って、教会の中に分裂が起こっていたのです。こういう問題の核心は自我です。だからイエス様は自分を捨て続けていきなさいと言います。だってその自我が私たちが神のみことばに従っていく邪魔をするからです。神の栄光を現す歩みを邪魔するのは自我です。我々が人からどう見られるかとか、そんなことはどうでもいいのです。神様がどう私たちをごらんになるかです。

ですからパウロが言うように、「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。」、ピリピ2：3です。そうやって仕え合っていきなさい、そうやってキリストが示されたように、キリストがああ謙虚さを示されて、そして父なる神のみこころに従い、神の栄光を現したように、我々もそんなふう生きて行くのだ。愛する自分が傷つけられたら、愛する自分が悪く言われてしまったら、どうでもいい話だと。私たちが嘆くのは自分がどう言われるからではなくて、私たちの愛するキリストがどう言われるかではありませんか？

ヨハネは1ヨハネ4：20-21で「神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。私たちはこの命令をキリストから受けています。」、我々は神を愛する者として生きる。ということは私たちは兄弟姉妹をも愛するのです。ここに出てきた罪は隣人に対するものです。教会の中であって、兄弟姉妹たち、隣人に対する罪が出ています。なぜ兄弟姉妹たちを愛していない罪が彼らが霊的に幼稚だと言えるのか——。それは隣人への愛は私たちの神への愛を明らかにするからです。今みことばを見たように、神を愛していると言う人は神が言われることを行おうとします。でも神を愛していると言いながら、神が喜ばれないことをするということはその行いが神を愛していないことを明らかにしているのです。

B. 霊的幼子からの脱却 5-9節

さて、こうしてこの教会の霊的な状態を明らかにしたパウロはどうしたらこういった霊的幼子の状態から脱却することができるのかを5節から教えてくれます。

1. 神を見上げること 5-7節

5-7節を見ると、神を見上げなさいとパウロは言います。人ではなくて神を見上げるのだと教えます。5節「アポロとは何でしょう。パウロとは何なのでしょう。あなたがたが信じるために用いられた奉仕者であって、主がそれぞれに与えられたとおりのことをしたのです。」と。二版は「奉仕者」ではなくて「しもべ」と訳しています。ここで使われていることばは、奴隷ということばではなくて食卓で食事を出したりする給仕する人という意味を持ったことばです。この教会の中には確かにパウロ派とアポロ派がいま

した。パウロは、我々は神様によって用いられたただの「奉仕者」、「しもべ」にすぎないと言っているのです。あなたたちがこの救いに入れられるために、あなたがたが信じるために用いられた奉仕者だと。確かに神は私たちを使って福音を語らせ、それによってあなたたちはイエス・キリストを信じる信仰に至ったかもしれない。でも褒められるのは私たちではなく、そのすべてをなさった神なのだということをパウロはこの後教えていくのです。6節に「私が植えて、アポロが水を注いだ」とあります。パウロは植える、つまり福音の種を蒔くという働きを主からいただいて彼はその働きを行ったのです。アポロはその蒔かれた種に水を注ぐという働きです。確かに働きにおいては違う働きです。でも、大切なのは、「しかし、成長させたのは神です。」とあります。7節にも「ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神」なのだ。こうしてパウロは本当に大切なのは、称賛されるべきお方は神だけなのだということを明らかにするのです。それは神が成長させてくださったからだと。

恐らく皆さんも愛する人たちに一生懸命キリストの福音を語ろうとして、そういう経験をされたと思います。あなたがどんなに愛を込めて熱心に福音を語っても、その人が救われたのはあなたの熱弁によるものではないのです。神の恵みによるのです。ですから種蒔きにしても、水をやる働きでも、そこから芽が出てきたら、それは神の働きだと。しかも芽が出たその種が信仰において成長していく、その働きも実は神の助けなのだ。もちろん我々はひとりひとり成長するためには責任があるのですが、彼が言わんとしていることは、種を蒔いたパウロ、その後成長を手助けしたアポロ、確かにそれぞれ異なった働きをしたけれども、我々はただあなたたちが救いにあずかるために用いられた器にすぎない、しもべにすぎない、奉仕者にすぎないということです。神が芽を出す働きをしてくださる、神が成長させる働きをしてくださった。この方だけがほめたたえられるべきお方だと言うのです。

おもしろいのは、パウロが植える、アポロが水を注いだというのは、二つとも不定過去という時制を使っています。「しかし、成長させたのは神」だの「成長させた」は未完了形を使っています。なぜ時制を変えたかということと意味があります。パウロは、自分たちの働きが過去になしたことなのに対して、神は過去に働きを始め、その働きを今も継続されているということを示したかったのです。今も神は人々のうちで働きをなしている。今も神は人々を罪から救ってくださる。今も神は人々を成長させる働きをなさっておられると。7節でも「成長させてくださる」とあります。これも現在形が使われています。神がこういう働きを今も変わることなくなしておられる。だからこの方だけがほめられるべきだというメッセージです。

今見てきたような問題を抱えていたコリント教会、彼らの問題は神ではなく自分たちを見ていたからです。そこでパウロはあなたたちの目をしっかり神に向けなさい。自分たちを見たり、ある人間を見たりではなく、私たちがしっかりと見るべき方は神だけなのだということを明らかにするのです。幼子たちの特徴というのは神にではなくて人に目が向けられていると。だから神を見なさい、それが霊的幼子からの脱却の鍵だと言うのです。

2. 神に忠実であること 8-9節

二つ目にパウロが教えてくれるのは、神に対して忠実でありなさいということです。神を見上げるだけではなく、神に対して忠実であれと。

1) 協力して仕える 8節

8-9節に「植える者と水を注ぐ者は一つとなって働き、それぞれ自分の労苦に応じて自分の報酬を受けます。私たちは神のために働く同労者であり」とあります。パウロは「植える者と水を注ぐ者」の話はずっと繰り返しています。この働き人はライバルではないと言っているのです。どっちが偉いとかどっちが勝っていると競い合う関係ではないと。「一つ」だと言ったのは、私たちは同じ目的を持ち、同じ動機を持って主に仕えているしもべにすぎないと。パウロにしてもアポロにしても望んでいることはただ「一つ」なのです。どれだけの人を救おうかではないのです。どれだけの人を立派に成長させるか、それは確かに願いとしてあったかもしれない。でも彼らの願っていたことは、神が私たちをこの働きに召してくださった以上、その働きに召してくださった神を喜ばせるために私たちはその働きに忠実でありたいと願ったのです。

そしてこの責任はひとりひとりにあります。8節に「それぞれ自分の労苦に応じて自分の報酬を受けます」と書いてあります。私はそういうフルタイムの働きではありませんとか、私はこういう働きではありませぬ。いいえ、皆さん、神は我々ひとりひとりに違った務めを下されたのです。その務めが何であろうと、我々信仰者に課せられた責任は、神が私たちに与えてくださった霊的賜物を使うことです。ここに書いてあるのは、それぞれが「自分の労苦に応じて自分の報酬を受けます」です。あなたも自分のやったことに対する報酬を受けます。ここにはあなたが何を達成したのか、あなたの成果によっての報いと書いてはいないのです。何人の人を救ったとか、こんな働きをしてきたとか、これだけの教会を建てた、そういうことはどうでもいいのです。神が問うておられるのは、ここにあったように「自分の労苦

に応じて」なのです。つまり神は、私が命じたことをあなたは忠実にやったかどうかを問われるのです。

この世の中は違います。どんな成果をもたらしたのか、何を達成したのかによって評価されるのです。信仰は違うのです。神があなたに問われることは私の命じたことを忠実にやったかどうかです。人間は結果で判断します。でも神は過程でもって判断されるのです。私たちは協力して仕え合う者でしたと。同じことが教会についても言えるのです。ここで私たちは競争しているのではないのです。我々は信仰者として、神が喜んでくださることをしていきたいのです。神が褒められたらそれでいいのです。そのためにはひとりひとりが与えられた賜物を用いることなのです。そしてあなたがその賜物を用いて主に忠実に従うならば、そのあなたの労苦に対してふさわしい報いが与えられると聖書は言うのです。

2) 主に仕える 9節

パウロは自分たちは「同労者」ということばを使っています。これはともに働くという意味です。二版だったら「協力者」ということばが使われています。どちらにしても神とともに働く者たちです。あなたは神とともに働くのです。

そこで勘違いしてはならないのは、神はあなたの働きを必要としているのかということ。神はあなたの働きがなければ、あなたの助けがなければ、ご自身のみこころを行えないのかということ。100%ノーです。ご自身のみこころを行うのにあなたの助けなど必要としない。この方は全能のお方です。この方はどんなことでもできるのです。ではなぜこんなことを神様はよしとされるかということ、あなたや私に神とともに働くという特権を下さったのです。こんな私たちも神とともに働くことができるのです。この神が命じてくださったことを我々は実践できるのです。覚えなければいけないのは、もしそれをあなたが望むならば、あなたがそれを望んでいなければ、神はあなたを用いることをしない。でもあなたが神様に用いられたいと願うならば、神様はあなたを喜んで用いてくださる。あなたが神の前に立った時に、だれかのせいにはできないのです。怠慢はあなた自身の問題です。不信仰はあなた自身の問題なのです。神は何度もチャンスを下さっている。我々は「神のために働く同労者」だ、神とともに働く者たちだとパウロは教えます。

そして、最後に出て来るのは「あなたがたは神の畑、神の建物」だということ。何を指しているかということ、コリント教会のことを言っているのです。「畑」、「建物」、まさにそこにおいて神が働くということ。この「畑」——コリント教会において実を結ぶために、神は働き人たちを用いてご自身のみこころに沿って耕していかれたのです。また、働き人たちを用いて、この教会を建て上げていられる。ちょうど建物が建て上げられていくように。パウロはあなたたちも働く私たちもみんな神の所有だと教えます。ですから、「神のために働く同労者」、「神の畑」、「神の建物」、所有者は神なのだ。彼は最後に言うのです。だから私たちはこの所有者である方に忠実であることが必要だと。神様は今、この神に仕えるという機会を、特権を私たちに与えてくださっています。感謝なこと。こんな神のお役に立てる。こんな神が望んでおられることを私たちは行っていくことができるのです。しかもそのために必要な助けはもう既に与えてくださった。しっかり主を見て、主に従っていくことです。その時にあなたの信仰が成長していく。

きょう最初に我々が見たように、みことばをただ聞くだけであっては成長しない。みことばを実践することによって、同時に私たちを用いてくださる聖霊なる神の助けをもらいながら生きていかなければいけないのです。年齢や教育、仕事とは関係ない、神様、私はあなたによって用いられたい。神様、どうか私に力を与え、みこころのままに私を使ってください。ただあなたの栄光が現されるそんな器として私を使ってください。私がこのみことばを実践することによって少しでも成長し、あなたのすばらしさを証しするために、あなたが教えてくださったそのみことばを忘れないように努力しますから、神様、私を助けてくださいと。そう願う信仰者を神様が見捨てると思いませんか？そんな信仰者が少ないから、神が用いることができない。あなたはどちらですか？主よ、私を使ってくださいとあなたを神に明け渡すなら、神はあなたを使ってください。過去を振り返っても仕方がない。我々は今からそうやって生きていくのです。そして神が栄光を現す器として、神のみこころのままに使っていただく。その時に私たちは主にお会いする日を楽しみに、この日を生きることができます。きょうからそのように生きていきましょう。